



2限目が終わったらこの教室に来るように
幼馴染の冬立さんから言われている。

このクラスは午前中はずっと体育があるので
誰もいないはずなんだけどなんだろう。

それにしても最近呼び出しが多い。

呼び出されても

なぜか追いつかれない。いったい何考えてるんだ？

冬立さんはすべてのカーテンを閉めた教室で待っていた。
もちろん廊下側のカーテンも閉まっており、
室内灯がなければ薄暗いだろう。

「最近なんなんだ？授業が始まるから用事があるなら早くしてよ。」

「この頃 私の体ばかり見てるでしょ。」

「だからなんだ？」

「そもそも見てないし自意識過剰なんじゃないか。
それに部活やめてからか
なり太くなったんじゃないか。」

最近 貧乳だった彼女もクラスの中では
普通くらいの大きさの乳になっている。
正直 乳や尻に目が行ってしまうのは仕方ない。

私が言い終わってしばらくすると、
お尻を突き突き出すようにして彼女は
スカートの中のパンツを見せてきた。



「ほら見てる」

見せてきてそれはないだろう。
冬立さんはいつもながら強引だ。

「パンツの中も見てみる？」

「え？」

「あ、

今すごいスケベな顔した。
やっぱり中も気になるんだね。

見せてくださいは？」



「いいえ。いいです。」

「あ？」

中も見せてくださいは？」

「はい…。
パンツの中も見せてください。」

そう私が言っただけでしばらくしたら彼女は尻を軽く振り、

「ぼつとしてないでパンツ脱がすの。
中を見るんですよ。」
と言った。

私がやるのか？

スカートの下から手を入れ
彼女の腰あたりを探りパンツをつかんだ。

そしてゆっくりとパンツを下していった。

その時触れたムツチリとした
肌の触感に脳がチカチカする。

以前彼女がけがをして手当てしたときに触れた
筋肉質な感覚とは違いすぎて混乱した。



パンツを脱がし終わるとちやうど
彼女の股間が目の前にあった。

睾丸から精子の独特な匂いと、
ま○こからは少し酸っぱいような匂いが立ち込めた。

この匂いは精子が溜まりすぎているうえに
それに今生理が近いのかもしれない。

正直なところ臭かったが嫌ではなかった。

「なに勃起してるの。」

彼女のお尻が大き過ぎて
私の顔が隠れて見えないはずなのにそういつてきた。

「勃起なんかしてないよ。」

もちろん勃起している。



「そうやっていつも嘘をつく。」

「なんだよもう。」

「冬立さんは何のために私を呼んだの？」

「君は黙って私の言うことを聞いていたらいいの。もう。」

「今度は私の方が勃起させるから見て。」

「そんなところにはいたら私のお尻が見えないから後ろにさがって見てよ」

「いろいろ命令が多い人だ。」

「私にペニスを見せつけて何をしたいんだ？」

彼女の後ろに下がった私の顔を見たあと、
ゆっくりとペニスを机にこすりだした。



しばらくすると少しずつペニスが大きくなり出し上向きになってきた。

それにしても冬立さんのペニスはデカイ。

幼い時から一緒にいるので
不意に勃起するところを数えられないくらい見てきたが、
毎回そう思ってた仕方がない。

小さい頃はスカートの下から
ペニスが出るがよくあってよく庇っていたが、
中学から運動部にはいってからは
年に何回か見る程度になっていったな。



数分たったが勃起はまだ完璧ではなく
少しずつ大きくなってる。

これだけ大きいので
普通の人のようにすぐ大きくなるなんてことはない。

勃起に時間がかかるので
不意な勃起が起きてもこの大きさまでには大体、
冷静になったり安全な場所に
移動したりするので亀頭が見えるなんてそうそうない。



どうやらちゃんと勃起したようだ。
天井を突きそうな勢いがある。

ここまで勃起するのを見たのは片手で数えるくらいしかない。

「何、ぼつと見てるの？
あんたを呼んだ意味わかってる？」

「え？その？」

「なんか言ったら？」

そういえば授業がもう始まっているんだった。
「冬立さんは体育の授業は出なくていいの？」



「はあ？違うでしょ。
この状況で褒めるなり、
感想なり言わないあんたなんか価値がないね。」

何？
秋川さんと比べたら小さいペニスだから
褒められないっていうの？」

彼女はあきれたように言うが、
心なしかペニスがさらに勃起して大きくなっているような。



学年共用のロッカーを調べると
冬立さんのコンドームが入っていた。
冬立さんのペニスは大きいのわりに
超根用の規格品では合わないらしい。先っぽが細いので

それにしてもロッカーに
冬立さんより大きいコンドームがいくつもあるってことは、
彼女より大きいペニスの人が沢山いるってことだよな。



「そんなことございません。
とても立派なペニスでございます。」

「心がもってないけどそんな感じでもっと褒めるのよ。」

なんで私が呼ばれたんだ？

「解ったらさっさと私の亀頭にコンドームを乗せてくれない？
私専用のコンドームはそのロッカーに入ってるから。」



もちろん校内で射精をしても問題ない。
超根本ななりこの射精管理は難しいので
いつでも出していよう専用の射精室があるくらいだ。
コンドームの配備も大量の射精で回りを汚さないためにあるらしい。
それにしても今まで冬立さんに性的な興味はなかったけど、
最近はどうしても気になって仕方がないのはなぜだろう。
彼女の体つきが変わったというのもあるけどびよっとして。

コンドームをある程度
かぶせると彼女は自分で装着していく。

「それに 変な気は起こさないでよね。」

私を見て自慰をするのは勝手だけど。

校内での性行為は校則で禁止されているから
私には触らないでよね。

禁止されてなくてもあなたなんかとはしないけど。」



「そういえば、
冬立さんって結構美人だね。」

「え？」

「冬立さんは好きな人いるの？」
彼女の動きが突然止まる。」

強い鼓動の音が微かに聞こえる。
ペニスも鼓動に呼応するようにわずかに膨れたり萎んだり出した。



冬立さんの睾丸がキュツと締めあがって
パンパンに膨れ上がって今にも爆発しそうだ。

彼女の射精の瞬間は見たことないから想像がつかない。

「なんで急にそんなことを言うの？
そんなことは言わなくていいの。
ううっ。
コンドーム付けたばかりなのに中に入ったじゃない。」

「何が出そうなの？」

「もう冗談はやめて。」



「あぁっ。」

ドクンと睾丸とペニスが震え、
遅れて先っぽから勢いよく精子が飛び出てきた。

コンドームを付けているので飛び散る心配はないが、
なかったら天井に激しく叩きつけられてただろう。



「はあはあ。」

射精は終わったようだ。

冬立さんの精液がコンドームの精液溜めを膨らませている。
これだけで一般人の何十人分の量があるのだろうか。

「ああの……。冬立さんのペニス素敵ですよ。」

そう声をかけた時だった。



「ん。」

冬立さんの体はブルブルが震えだし、
しばらくしたら先ほどのように射精してしまった。

表情は苦しそうで、
必死に出るのを我慢しているようにみえる。
あれだけの量をあの長いペニスから出しているのだ。

彼女の性器や骨盤底筋はかなり負担がかかっているのだろう。



そういえば冬立さんの部活の大会は今年からふたなりの参加は禁止になったそうだな。ふたなりはドーピングした男性より肉体的に優れていることがあるかららしい。

以前、大会に出れなくなったって相談を受けたことがあったな。もっと慰めてあげればよかったのかもしれない。

30分後
冬立さんは断続的にはあるがまだ射精を続けている。

射精が止まりそうになったら声を掛けると瞬く間に射精が復活する。

特に彼女が部活で頑張っていたことを言うとうと射精が強く復活した。やっぱり部活の事で悩んでいたから最近の様子が変わったのか。



どうやら精子はもう出し切ったようだ。

ペニスも充血して太きいままだが
勃起を維持するだけの力が残っていない。

彼女のペニスは精液をパンパンに膨らませた
コンドームの重さに負けだらんとしなるように頭を下けている。

「ふー。」

スツキリした。

あもうあっち行っていいよ。

ついでに私のコンドームも射精室のゴミ箱に捨てておいて。」

「え、用が済んだら邪魔者？」

「そうだよ。」

なに？

あんたのくせに生意気言うの？

さぼったのは商法どスペイン語でしょ。

解らなかつたら後で教えるから
私のペニスのケアを手伝ったらサッサとどっか行って。」

射精後いくらめんどくさくなるからってこれは酷いなあ。

彼女の10リットル以上ある精液をもって
廊下を歩かないといけないなんて情けないんだ。

そう思いながらコンドームの口を結びそれを持って教室から出た。



それから三日後
さすがに冬立さんも悪いと思ったのか
射精後、雑に扱ったことについて謝ってきた。

そこで射精前に言っていた内容の意味を問い詰められ、
結局私と冬立さんは交際することになった。

要はなぜ好きな人がいるかどうか聴いたのか。
そのことを強く迫られて半ば脅迫されぎみに
告白する羽目になつてしまつたのだ。

だからといつて普段の付き合い方は今までと変わりはない。

ただ違いといつたらセックスをするようになったのだが
若干私が冬立さんのオナホみたいなの
扱いになつてしまつている。

これからも冬立さんに振り回されるのであろう。







































































